

TV Animation Series

©BCE / Project Engage

VOLUME FOUR

*Engage Kiss*



M  
MAGI

TV Animation Site: Engage Kiss 4

EK



# 16 years ago

丸山 史明

EK4

Engage Kiss (Volume Four)  
Special novel by Fumiaki Maruto



4

「……許さないよ、マイルズ」

「許さなけりやどうする？ まあ、殺すんだろうけどよ」

「殺す殺さないの前に、やることがあるだろ、あんた……」

「やることつて……？」

「謝れよ！」

「……はあ？」

「三上さんに！ 今まで陥れた人たちに！ 殺した人たちに！ 騒していた人たちに！ 社長に！ アヤノさん！」

「俺の親父につ！ そして俺につ！」

「あのねつ、あのねつ……アヤノ、しゅーをおよめさんにするの！」  
「そ、そうか……」  
秋晴れの、週末の昼下がり。

緒方一家がベイロンシティに越してきてから毎月恒例となつた、モーガン家、タ桐家、緒方家合同のバーベキュー  
バー・ティの会場に、無邪氣で不穏な発言が響き渡つた。

「なのにね、なのにねつ！　しゅーったら、同じよーちゃんの子にちゅーされてたんだよ！　アヤノだつてまだしてないのにっ！」

「そ、そ、そうか……」

自宅の庭に設置したバーベキューグリルで肉を焼きながら、その家の当主、マイルズ・モーガンは、  
小さな招待客の、その突然の告白に目を白黒させつつ、それでも肉を焦がさぬよう網への目配りは忘れない。  
「それでねつ、それでねつ！　アヤノ、その子とほっこほっこになぐりあつたの。そしたらお母さんと担任の  
先生がすっこい顔して怒つてきてね！」

「いや、そりや小学生のアヤノが幼稚園の女の子とやり合つたらな……」

「だからマイルズもお母さんに言つてよ……アヤノまちがつたことしてないって。そもそもけんかりよーせー  
ばいだし。しゅーがうけたせくはらにこーぎしただけだし！」

「まあ待て、待つてくれアヤノ」

その、頬と額の辯創膏も痛々しい小学校低学年女子の主張にはマイルズも色々と思うところがあつた。

どつちがどつちをお嫁さんにするのかとか、キスという行為そのものが問題なのか先を越されたのが問題な  
のかとか、殴ることとセクハラのどちらも悪いのではないかとか……あと様々な問題点がとても近年のコン  
プラーに対してセンシティブなものばかりなのは何故なのかとか。

「と、とにかくだなあ、アヤノはお姉ちゃんなんだし、ここは大人しく謝つといた方が」

「アヤノしらない女のお姉ちゃんなんかじやない！　しゅーのお姉ちゃんでもない！　だつてお姉ちゃんだつたらしゅーをおよめさんできなないもん！」

# 16 years ago



Engage Kiss [Volume Four]  
Special novel  
by Fumaki Maruto

丸戸史明

※ ※ ※

「おいアキノ、お前、娘の世話をつちに押しつけといで自分だけのうのうと肉食つてんじやねえよ！」

「パーティの主催者がそんな狹量なことでいいのかしら？ そういう態度じや次から誰も来なくなるわよ？」  
その後、なんとか近所の女の子の、愚痴なんか惚氣なのが武勇伝なのかわからない会話から逃げ出したマイルズは、

そのまま側の椅子にのんびり座りつつ肉とビールを堪能している彼女の母親に、恨みがましい視線を向けた。

「それに今、あの子とは戦争中なの。だから私のところには絶対近寄つてこないわよ」

「アヤノから聞いたが……そもそも親子喧嘩したままウチに来るんじやねえよ」

「そんなこと言わないでよマイルズ。あんたからアヤノにそれとなく言つてくれない？ 向こうの子に謝れって」

「こん中じや俺が一番無関係だろが。せめてイサムやサユリに頼めよ……」

と、マイルズは、少し離れたテーブルで、こちらも我聞せずと食事を楽しんでる緒方夫妻を指差す。

「無理よそんなの。アヤノつたら緒方一家にはものすつごく外面いいんだもの。につこにこ誤魔化されてそれでい終了よ」

そして夫妻の側には、今のアキノの言葉を証明するかのように、シユウにべつたりのアヤノが、愛しの幼なじみの口にぎゅうぎゅうと肉を詰め込み、なんとも朗らかな空気を醸し出していた。

「そもそもアキノ、お前あんまりアヤノとの時間取れないだろ。だから反抗的になんじやねえのか？」

「そんなこと言つたって、来月には警視の昇任試験があるんだもの。一緒に過ごす時間どころか、家に帰る時聞すらも……」

「そんなんじや、アヤノが反抗したつてしようがねえだろ。そもそもお前さん譲りの腕っはしなんだし、幼稚園の子なんかと喧嘩したら、タダで済むはずが……」

「ところがいい勝負だつたらしいのよ……最近のアヤノつて、高学年の男子でさえ敵わないのに、一体どんな強敵と巡り会つたのやら興味あるわね」

「……お前がそんな考え方でいる限りアヤノが相手に謝ることなんてねえよ」

「そもそもだなあアキノ、シングルマザーのお前が仕事にかまけてたら、誰がアヤノの面倒見るんだよ？ セめて再婚とか……」

「嫌よ、男はもうこりごり。私にはアヤノさえいてくれればいい」

「だつたらちゃんと面倒見ろよ……」

ちなみに、彼女の入庁時の職場の先輩にして今は直属の部下のマイルズにしても、アヤノの父親の正体はまったくの謎だった。

いつ結婚していつ離婚したのか、いやそもそも入籍していたのかすら定かでないほど、アキノは自らのプライベートをひた隠しにしていた。  
……愛しの愛娘が生まれるまで。

「でも、まずは警視にならないと……退魔局のトップに立つためにはね」

「よくもまあ、あんな危険なポストに就きたがるな。悪魔退治の隊長様なんて、命がいくつあつても足りやしねえ」

「危険だからこそよ……何としても、この街から悪魔を駆逐して、シティ警察を安全な職場にしなくちやならないの。それが出来そうな人材が他にいる？」

「そりや、菖屋警部とか……」

「菖屋君なんて無理。あんな事なれ主義のお役人さんに何ができるの？」

「あの警部殿、お前よりよっぽど年上なんだがあ……」

「と、マイルズは、自分よりよっぽど若い上司を苦笑とともに見つめる。

「それよりも、まだマイルズの方が見込みあるわよ。本当に昇任試験受ける気ないの？ あなたなら警部補なんてすぐだし、三年あれば警部だつて……」

「前にも言つただろアキノ？ 僕は出世になんか興味ねえんだつて」

そして今度は、自分よりよっぽど若い母親を、憐憫の表情で見つめる。

「家族が元気なら、他に何もいらねえだろ……」

※※※

「なあ、シユウよ……お前、アヤノのことどう思つてんだ？」

「え？ エ？ マイルズおじさん、なんでそんなこと……？」

「まあ、俺もなんでと思わない事もないがな……女の恨みは買わないに越したことはねえってことだ」

結局、夕桐家の母娘の揉め事に強制的に巻き込まれたマイルズは、その元凶……いや、全ての始まりとなつたモテモテ幼稚園児のもとに足を運び、今は同じテーブルで男同士、腹を割つて話をしていた。

……まあ、彼を連れ出す時、自分の男を取られたと勘違いしたアヤノにものすごく恨みがましい顔で睨まれた時には、「自分は一体誰のために頑張っているのだろうか……」などと、結構な無常感に苛まれはしたけれど。「だからな？ シユウ、お前も女の子に余計な恨みを買う前に、相手にハッキリと気持ちを伝えた方がな……」「アヤノちゃんは大好きだよ……アヤノちゃんにも、いつもそう言つてる」

「お、そうか？」

と、シユウは、男同士の気安さからか、それとも話の分かる大人相手だからなのか、マイルズの問い合わせに、素直な想いを口にした。

「強いし、かつこいいし、綺麗だし……それにいつも僕を守つてくれる」

シユウの言葉は、彼の内気な性格もあいまつて、声は小さいし、少しかすれ氣味だし、語尾なんか消え入りそうなくらいではあつたけれど。

「あと、とつてもいい匂いがするし、髪の毛なんかツヤツヤだし……お肌はちょっと日焼けしてるけど、でもあつたかくて……ふれあつてると安心する」

「お、お、おう……」

それでも表現力も言葉遣いも、年上のアヤノよりよっぽど洗練されていて、しかもその口説き文句が超絶自

然に出てきているように感じられてしまふせいで、同性のマイルズですら「あ～コイツはモテるわ」と実感せずにはいられなかつた。

「でも、キサラちゃんも好きなんだ……」

「キサラちゃん？ その子がアヤノと喧嘩した同じ幼稚園の？」

「アヤノちゃんみたいにさっぱりした感じのコじやないけれど……とつても女の子らしくて、優しくて、可愛くて……あと、ほつべも柔らかくてぶにぶにするし、お肌はまつ白ですべすべで、ミルクの香りがして、くつづいてると嬉しくなつて……」

「……よくわかったそれくらいにしどけ。あとそつちはアヤノには言うなよ？」

そしてその口説き文句が複数の女性相手にナチュラルに湧いて出てくるせいで、「あ～コイツの周りは修羅場になるわ」と実感せずにいた。

「だから、アヤノちゃんとキサラちゃんには、本当は仲良くしてもらいたかったんだけどなあ……」

……なお、シユウがここで口にした幼稚園女子の名前については、この段階では特に意味のない事実であつたし、この時点で既にその名を持っていた彼女は悪魔ならぬ普通の人間であるということをここに明記しておく。

「そうか、お前もそう思つてるんだな？ なら話が早い。アヤノに、その子に謝るよう、お前からも頼んでくれねえかな？」

「それは……無理だよ」

「そんなこたあねえだろ。アヤノだってお前の頼みなら……」

「だつて今日、キサラちゃんの引っ越しの日なんだもん……今ごろもう、お空の上だよ」

「な……」

その後、シユウはマイルズに、その幼い彼女のことをほつほつ語つた……

彼女の父はとある国の外交官で、ちょうど先月末にこのベイロンシティでの駐在期間を満了し、本国への帰還が決まつていた。

そんな、ほほ間違いない今生の別れを悲しんだ彼女の方から、「シユウくんとの思い出が欲しい」などと、とても幼稚園児とは思えない告白を受けたシユウは、流されるように初めてのキスを捧げ……あろうことかその現場を、もつとも見られてはならない人物に見つかってしまったせいで、小さな恋のメロディ的な切ない別れのシーンが、極道の妻たち的な血で血を洗うド級修羅場へと変貌してしまつたらしかつた。

「なんてこつた……」

シユウが語ったその事実は、シユウ自身と相手の女の子にとつてはもちろん、多分アヤノにとつても、苦みの強いものとなるのは想像に難くなかった。

この事実を告げれば、もう二度と謝ることも、仲直りすることも、自分の罪悪感を払拭することもできないと知ったアヤノは、深い悲しみと後悔の念に、氷い間囚われるのはいか?

そう、この後のアヤノの泣き顔を思い、シユウと同じ哀しげな表情を浮かべたマイルズは……

※※※

「え? あの女ひっこしちやつたの!? やつたあああー! これで五にんめの敵もげきついだああー!」

「ええ……」

その心配がまつたくの杞憂に終わってしまったことに、ほんの少しの安堵と……

そして、アヤノの将来に関するたっぷりの不安を覚えたのだつた。

※※※

「ね? わかつたでしよう? 本当に子育てって難しいものなのよマイルズ!」

「いや現在進行形で子育てに失敗してるアキノに言われてもなあ……」

「まあ、とは言つても、子持ちじゃないのはマイルズだけだしなあ……お前には今の俺たちの苦労はわからんよ」「言つてやつて言つてやつてイサム!」

子供たちの説得工作に失敗し、苦い敗北感に浸つっていたマイルズのもとに、その子供たちとの対話から早々に離脱した親たちが寄つてきて、彼の戦果を根掘り葉掘り聞き出しては、まるで他人事のように批評する。

そのあまりに理不尽な状況に晒され、マイルズの喉を通るビールの苦みはさらに増していく。

「お前らそんな呑氣にしてるけどなあ、これからアヤノとシユウが大きくなつたらどうすんだ? 今の感じじじや。シユウが次々とガールフレンドを大量生産して、それをアヤノが全てぶちのめす未来しか見えんぞ?」「まあ、我が息子がそんなにモテモテになつてくれたら、俺としちや「よくやつた」って褒めてやるけどな……そうはならんだろ。モテるのは幼稚園までさ」

「そうよ、なるわけないじやない。今はアヤノも自分の世界が狭いから、側にいるシユウ君に執着してるだけよ。中学生にでもなつたらすぐには別の男の子に目移りするつ」

……という、互いの親の楽観的な未来予想図に、マイルズだけが「本当にそうか?」と眉をひそめていたが、結局誰の予測が正しかったのかは、この特典小説の読者諸兄には既に明かされている通りなのでフフッと含み笑いでもして読み進めていただきたく。

「それに、親としちやそんな未来のことを心配して余裕なんてないんだ。お前らには普通に接してゐみたいだけど、シユウも難しい年頃でなあ……」

「……イサム?」

「シユウ君、どうかしたの?」

「……サエリに懐かない? シユウが?」

「今まではどうちらかといふと、マザコンかつてくらいにべつたりだつた気がするけど」

「まあ確かに、ちよつと前まではそうだつたんだがなあ……」

バーべキューも終盤に入り、随分と酒が回つたせいか、イサムの口が滑らかに、緒方家の個人事情を詳らか